



城

第四十四回 岡山城

～宇喜多直家と秀家、波乱の生涯～

深草 祐一

今回は、烏城として知られる黒い城、岡山城を取り上げ、ここを根拠とした謀将・宇喜多直家と、その息子で戦国きってのセレブ武将と言われる備前宰相・宇喜多秀家についてご紹介します。宇喜多直家は、戦国ゲームで暗殺等の謀略の成功率が非常に高く設定される恐るべき武将です。また、宇喜多秀家は、豊臣政権の若き大老として栄華を誇りながら、一転、関ヶ原で全てを失いました。その親子二代にわたる、波乱の人生を見ていくことにします。

備前の情勢と宇喜多直家の台頭

播磨・備前・美作の守護であったのは赤松氏でしたが、戦国中期になると、被官人や国衆が自立を強め、中でも西播磨から起こり備前守護代となった浦上氏が勢力を伸長していきます。この過程で浦上氏の有力部将として活躍したのが宇喜多直家の祖父にあたる宇喜多能家でした。しかし、能家は、隠退していた砥石城で、同じく浦上氏の部将であった島村豊後守に襲撃され自刃します。そのため、幼い直家は父興家に連れられて流浪したといい、直家は、祖父を謀殺されたが故の惨めな境遇の中で様々な思いを抱えて育ったものと思われます。やがて成長した直家は浦上宗景の下へ出仕。裏切りが横行し疑心暗鬼が渦巻く中で、直家は主君浦上宗景の命を受けて、内通した部将を討って功を上げ、次第に所領を拡大します。妻の父親である部将に主君から謀反の嫌疑がかかった際にも容赦はなく、十分に油断させてから殺害。その際、応援のためと欺いて、かねてから離反の噂があった祖父能家の仇、島村豊後守を呼び寄せ、これも討ち取りました。こうして、浦上氏の有力部将へと成長した直家は、次第に自立的な軍事行動を起こして勢力を拡大していくようになりました。例えば、戦上手の龍口城主には美少年を送りこんで暗殺し、城を攻め落としています。

毛利対織田の狭間で

この頃になると、西から毛利氏の勢力が伸張してきます。そして、毛利氏と深く結んだ備中の三村家親が毛利方の先鋒として美作へ侵攻してきました。そこで直家は、浪人を雇って陣中の家親を鉄砲で暗殺。怒った息子の三村元親が父の敵を討つべく2万の軍勢を率いて備前に攻め入ったものの、直家はわずか5千の兵でこれを撃退してのけました(明禅寺崩れ)。これに勢いを得た直家は、娘を嫁がせて和を図っていた名門の松田氏を容赦なく滅ぼし、さらに勢力を拡大させました。宇喜多直家が岡山城(当時は少し西側の石山に築かれており、石山城と呼ばれていた)を手に入れたのはこの頃のことです。石山城主を内通の嫌疑をかけて切腹させ城を接収すると、増改築を行うとともに城下町を建設しました。それまで備前で栄えていたのは備前福岡などの東部地域でしたが、以後、備前中央部の岡山城下が発展していくことになります。

さて、石山城に拠点を置いた直家は、主君の浦上宗景が織田方に付いたにも関わらず、足利義昭の仲介で毛利氏と和議を結びました。これを容認できないのが直家に父を暗殺された三村元親で、重臣らの反対を押し切って毛利氏と手を切り織田方に付いてしまいます。すると直家はこれを好機とばかりに毛利勢と共に備中松山城の三村氏を攻め滅ぼしました。そして、入念に準備を調えた上で主君浦上宗景の天神山城を攻め、美作、播磨まで兵を進めて制圧しました。こうして下剋上を成し遂げた宇喜多直家は、備前、美作そして播磨の一部を領有する有力大名となったのでした。

しかし、羽柴秀吉が織田信長の命を受け、本格的に中国地方攻略に乗り出してくると、直家は織田方へ付くことを決断し、再び毛利氏と対立することになります。そし

て、織田方の先鋒として、攻め寄せる毛利の大軍と再三にわたり激戦を展開しました。その最中、直家は謎の病にかかり、亡くなります。血と膿を染み取った衣が毎日のように川に流されていたといい、敵を謀殺し続けた男の凄絶な最後でした。ただ、直家は、敵や姻戚には非情な手段に訴えても、家臣と親族は大事にした人物であり、そうして築き上げた家臣団は、直家の死後、息子八郎を奉じて宇喜多家を支えていくことになります。

八郎秀家の栄達

宇喜多直家が亡くなった時、嫡男の八郎は弱冠10歳。直家の死後に羽柴秀吉が岡山城へ進出してきた際、たいそう美人であったという直家の室のおふくは、我が子を守るために進んで秀吉の側室となったといえます。自分の子が無かった秀吉も八郎を我が息子として迎えると言って家族同然に扱い、後に「秀」の一字を与えて秀家と名乗らせました。さらに、秀吉は、前田利家から養女としてもらい受け可愛がっていた豪姫を秀家と妻合わせます。こうして秀家は天下人豊臣秀吉の一門衆として、直家が遺した家臣団とともに、四国、九州攻め、小田原征伐、朝鮮の役などに陣出して戦功を上げていくのでした。それらの功により、秀家は、参議、続いて従三位中納言に叙せられ、さらに五大老の一人に加わります。このことから、秀家は備前宰相と呼ばれました。

宇喜多騒動と関ヶ原

豊臣秀吉の天下統一がひと段落した頃、宇喜多秀家は石山城の大改修を開始しました。普請にあたっては、豊臣政権の重責を担う宇喜多家にふさわしい近代的城郭とするように、秀吉からの指導があったようです。石山を削って東側の岡山を新たな本丸とし、その北から東は旭川の流れを変えて天然の濠となし、南から西にかけて石垣でかためた郭の間に濠を廻らせるとともに、その西側一帯に城下町を整備するという巨大事業で、一応の完成をみるまでに8年の歳月を要しています。これ以後、城は岡山城と呼ばれるようになりました。この築城工事で普請奉行を務めたのは、豪姫の付け人として前田家から派遣されてきた中村次郎兵衛という人物で、計数に長け、土木工事に優れた才能を発揮しました。秀家は、内政手腕に優れた重臣の長船紀伊守を重用し、その下に中村を付けて共に領国経営を任せました。しかし、これが他の重臣たちに不満を抱かせていくことになりました。何事にも派手好みの秀吉の影響を受けて育った豪姫と秀家は、57万

石でも賄いきれない百万石並みの生活をしていたようで、そのしわ寄せが領国経営に及んでいました。さらにキリシタンと旧来の日蓮宗徒との間の軋轢もあり、宇喜多家中の不和が広がっていきます。そして、長船が病死すると(一説に毒殺とも)、他の重臣が揃って中村の処分を秀家に求め、ついには重臣らの立て籠りという深刻な事態にまで発展しました。最終的に、それまで事態の悪化を放置していた徳川家康が裁定を下し、重臣達は他家へ預かりとなりました。この結果、直家以来の有力な家臣団の多くが宇喜多家を去ることになり、来る関ヶ原の戦いを前に、徳川に敵対する可能性のある宇喜多家は大きく弱体化させられることになったのでした。

しかしながら、その後の仕置家老に抜擢された明石掃部頭全登は、古くからの家臣ではなかったものの、大きな穴の空いた体制を短期間のうちに立て直します。そして関ヶ原の戦いでも、西軍最大兵力の作戦指揮を担って激戦を繰り広げました。ただ、関ヶ原の戦いの結果は周知のとおり、同じく豊臣一門衆である小早川秀秋の裏切りにより西軍の総崩れという結果となりました。関ヶ原を落ち延びた秀家は、薩摩の島津氏に保護され3年間を過ごしますが、ついに出頭。島津氏や豪姫の兄前田利長からの助命嘆願もあり、処刑を免れて最終的に八丈島へ流されることになりました。秀家は不自由な暮らしの中で84歳まで生きたと伝わります。既に四代将軍徳川家綱の世となっていました。

その後の岡山城

関ヶ原後の仕置きにより、岡山城にはあの小早川秀秋が入りました。この時に岡山城は更に改修され城下町も拡張されています。しかし、小早川秀秋は2年後に急死。無嗣断絶となって、池田氏が入ります。日本三大名園のひとつ後楽園の造営は池田氏の時代でした。明治以降に濠のほとんどが埋め立てられる中で、天守は戦時中まで残っていましたが、空襲で焼失してしまいました。しかし、扁平五角形の天守台に建つ独特の黒い天守が鉄筋コンクリート造りで外観復元され、後楽園の背景に華を添えています。



後楽園から見た岡山城天守